

円福大黒天縁起（円福大黒天の由来）（意訳）

畏れ多くも振り返つてみますと、大黒天様は、インドの神様で、仏さまのみ教えの守り神でした。仏様のみ教えは中国に渡り、仏様、仏さまの教え、仏さまの教えをいたたく修行僧の三つの宝を尊ぶ人々が満ち溢れ、仏教は大いに栄えました。しかし、中には貧しいお寺もありました。そのお寺は、人々のお布施は少なく運営に苦しんでいました。

そのお寺にある寺男が来てくれました。その寺男は働くことを厭わず、お寺の田畠を耕し、朝はお日さまが上る前に起き、お日さまが上ると一日中よく働き、夜は一晩中小槌を振つて藁を打つて縄を作り、俵を編んで作り、やがて収穫の秋には、米俵を山と積んで、修行をしている僧侶に供養しました。贊沢を戒めて貯金し、貯金袋の口は引き締めて無駄遣いをせず、人のため、世のための布施行に励みました。常に謙虚の頭巾をかぶつて自分を高く見せることは無く、いつも笑顔で人と会つていました。周囲の人々はこの寺男を敬つて、インドの大黒天の身代わりであろうと、讃えました。たたこうして貧しかつたお寺は、仏さまの輝きが四方に広がるように立派になり、慕う人々が増え、教えも広がりました。

寺男が長寿を全うしてお亡くなりになると、そのお寺の住職をはじめとして僧侶全員がそのお徳を讃え仰ぎ、寺男の木像をつくつて、庫裡の真ん中にある大きな柱の基に祭壇を作つてお祀りし、お寺をまもつてくださるように、そして仏教が盛んになりますようにお祈りをしました。これが大黒柱の由来です。

言うまでもなく、家を支えるのに大黒柱の役目は非常に重要です。家の繁栄、会社の繁栄、組織の繁栄などすべての経営も同じです。

この大黒天を伝教大師（最澄）は日本の国にお迎えして、比叡山に大黒天さまとしてお祀りしました。日本の国民は誰もがこの大黒天を、家が栄え豊かな収穫をもたらす福の神として信じ、そしてお祀りしました。やがて、商業の神の恵比寿天さま、農業の神を大黒天さまとして、七福神のお仲間になられて、縁起めでたい、日本の国の大黒天さまになられました。

日本の国民は誰もがその尊いお像を拝み、励み働き、日本は今世界の経済大国に発展しました。打出の小槌とは、勤勉な日本の国民の生産力です。今、日本の国民はお金を持っていることにおごり高ぶることなく、大黒天像の俵のように資本を基礎にして、打出の小槌に表される労働を惜しむことなく、いつもニコニコとやわらかな笑顔と温かい言葉をもつて、世界が平和であるように、困っている人がいないうに、蓄えたお金を使い、貢献すると、善行を積んだ、幸福を呼びこむお徳による利他行（世の人め人のためにつくす行い）によつて、世界中の全ての人々が平等にご利益を受けるでしょう。

おかげさまで円福寺に大黒天をお祀りすることができて、円福大黒天さまのご利益によつて、限りなく大きな、無尽蔵の幸福を呼び込むお徳を願い、いただき、すべての人のやすらぎと楽しみと、永遠の平和を祈り願うものです。

円福大黒天さま、永遠に地球上のすべての生きとし生けるものをお守りくださいますよう。

心より祈り合掌します

昭和五十八年 元旦

龍眼山圓福寺 十九代

法子 幸邦 敬つて申し上げます。